

保育内容「環境」の授業方法研究

程野 幸美

大阪信愛学院短期大学

Human and Environment Vol. 12 (2019)

Research on Teaching Methods for the Subject “Essentials of Childcare (Environment)”

Yumi Hodono

Osaka Shin-Ai College, Japan

教員・保育士等養成校(短期大学)において「保育内容「環境」」の授業を通して、著者の幼稚園教諭経験から得られた教育・保育現場での知見や事例等を学生に提示し、「環境」について幼稚園教育要領・保育所保育指針に基づく成長・発達段階における「環境」の重要性について学生の知識・認識を深めること、また将来、保育現場での子どもの様々な変化に対応して、子どもの好奇心を刺激し、見たい・知りたい・やって見たい、と感じ活発に活動ができるよう実践的・具体的な関わり方・指導法等の思考の基礎を身に付けることを目標に、著者の保育内容「環境」の授業方法を実践した。

本授業の進め方として、著者の保育体験事例をその授業の中で提示し、学生間、学生・教員間での討論を繰り返しながら、学生の持つ狭い「環境」のカテゴリーをさらに拡大させ、深め、子どもは常に「自然環境」と「人間・社会・文化・生活環境」という2つの環境の中で生活し、成長・発達して行くことを学生自身に考えさせ、理解させるよう努めた。また、様々な環境や環境素材を準備し、教材化できる能力や、子どもに合せた環境構成ができる実践力を身に付けるなど、知識と実践力の涵養に有効であると思われる授業の内容や進め方について述べた。併せて、指導案の作成方法についても考察した。

キーワード：子どもの環境の捉え方・環境を通した子どもの学び・対話式による授業方法

1. はじめに

教育基本法第11条[1](幼児期の教育)において、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体

は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならない」と定められている。また、学校教育法第22条[2](幼稚園の目的)にも、幼児の健やかな成長のための環境の重要なことを謳っている。さらにこれらを根拠法令とした幼稚園教育要領[3]の冒頭にも、幼稚園教育は、学校教育法第22条に規定する目的を達成するため、「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」と規定している。即ち、「環境」を通じて行われることを幼児教育の大前提としていることがわかる。このことから、幼児教育者養成校で学ぶ学生は、先ず「環境」を十分に理解することが最

*大阪信愛学院短期大学子ども教育学科
〒536-8585 大阪市城東区古市 2-7-30
E-mail: yhodono@osaka-shinai.ac.jp

受付：2019年8月7日 受理：2019年8月30日

©2019 大阪信愛学院短期大学

重要課題であると言っても過言ではない。

著者は長年、幼稚園教諭として保育現場で子ども達の心身の発達と人格形成の基礎を養う援助に携わってきた。その中で、子どもが「環境」から様々な学びを得る姿に接し、子どもの成長・発達と「環境」は密接に繋がっており、とくに子どもは遊びを通して、自分の置かれた環境の様々な事象（社会環境・事象・自然・文化・生命への尊重等）と自ら関わり吸収することで日々、学び成長を遂げていることを実感してきた[4]。

本論文では、教員・保育士等養成校(短期大学)において「保育内容「環境」」の授業を通して、著者の幼稚園教諭経験から得られた保育現場での知見や事例等に基づき講義を行い、子どもの成長・発達段階における「環境」の重要性を学生が認識を深めるとともに、将来、教員・保育者として常に子どもの好奇心を刺激し、子ども自らが知りたい、やって見たいと感じ、活発に活動ができるように様々な環境や環境素材を準備し、教材化できる能力や、また、子どもに合せた環境構成ができる実践力を身に付けるなど、知識と実践力の涵養に有効であると思われる授業の内容や進め方について考察したものである。

2. 授業概要とその進め方

保育内容「環境」授業の概要を以下に示す。

保育現場における「環境」の領域は多岐に渉る。保育内容「環境」の分野は、遊びの中で育まれる個々の子どもの感性や社会環境・事象の変化・自然・文化・生命の育み等子どもを取り巻く様々な環境に、子ども自らが関わることでより身近なものとなる。そのためには、保育者から子ども達への働きかけが何より重要であり、ここに保育内容「環境」における教育的な意義があると考えられる。また、その授業内容については、著者の保育現場での子どもへの「環境」の領域として行った指導内容、及び新たに改定された新教育要領[3]を総合的に捉え 5 項目別の授業内容のテーマによる講義を行うことで、より受講学生がその領域についての理解が深まることを目指し授業展開した。

この授業の対象者は、1 回生前期、授業回数は 15 回(試験を除く)である。

授業内容の概要は以下のごとくである。

- ・ 動植物を通じての子ども達の生命への育み(命の尊さ)について
- ・ 自然への子ども達の関わり方と文化との結びつき
- ・ 文化としての数・文字等の子ども達の身近な生活との繋がり
- ・ 日本の祝祭日の在り方(園内の行事等)と子ども達の生活環境との関連
- ・ 子ども達が興味・関心・好奇心を持てるような指導を行うことの重要性

これらについて授業は以下のごとく進めた。

先ず、①保育内容「環境」授業内容の理解と「環境」とは何を指すのかについて考える。次いで、具体的な授業内容として ②事例による検討;子どもと戸外活動の実際的な活動事例を紹介する。その事例をもとに学生間での討論を通じて、この事例が子どもの発達や成長にどう関わるのかを考える。さらに、学生に四季を通して、落ち葉の色彩・葉脈等の違いに学生自らが気付きそれを教材とした模造紙等を使用した環境遊びとしての授業の展開をしていく。また、命の大切さや命あるものへの慈しみや優しさを育む授業として ③あさがおの観察栽培を行い、土の持つ感触及びあさがおの成長観察記録による生命への育みの実践、また、文化、伝統などを基礎に社会性や人々との繋がり大切さを感得するために、この、あさがおの観察栽培事例の検討を含む、子どもの園生活を通じた、日本の伝統文化(子どもの日・七五三・お正月等)とその繋がりを様々な園内活動の中から具体的に考えていく、例えば、時節のはがき作りを通じた保育活動や、子どもが保育室の中で目にした国旗への興味を通じた気付きへの言葉掛けとその保育指導(国際社会への興味)等を主な講義内容とした。

これらの内容を著者の保育経験から得られた事例を提示し、それを基にして具体的に学生へ授業課題として提示し、授業を展開している。その授業展開の中で、学生が捉えた感じ方や思い・意見・内容に基づき、学生間、学生と教員間等で討論形式を導入した双方向授業を行っている。以下にその授業内容の概要を紹介したい。

2.1. 授業内容の概要

①保育内容「環境」授業内容の理解と「環境」の意味及びその授業展開

1) 受講学生(一回生 50 名)の「保育内容「環境」」の授業内容に関する理解についての確認を目的として、授業を始めるにあたって先ず、学生が当該授業についてどのようなイメージを持っているのかをアンケートによって明確にした。その回答結果を表 1 に示した。

表 1 の結果から、すべての学生が「保育内容「環境」」という言葉が持つイメージとして「自然環境」を中心として捉えており、狭い範囲での「保育内容「環境」」の領域への理解・認識であることが明確となった。著者が授業を行う上で学生らの「環境」についての意識改革を図る必要性が認識出来た。

この結果を踏まえて、「保育内容「環境」」に対する学生らの認識を深める授業導入のテーマとして「環境」を大きく、「自然環境」での営みと「人間・社会・文化・生活環境」での営みに分けて、学生との対話形式で次のような授業を展開した。

表1 「保育内容「環境」」はどのような内容を学ぶと捉えていますか

	回答数 (%)
1. 子どもの周りにおける環境としての自然的な内容	50 (100)
2. イメージが浮かばない	0 (0)
自由記載欄	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自然・物の位置 ・ 外に出て自然に触れると思った ・ 生き物や植物のことを詳しく学ぶと思った 	

先ず、「保育内容「環境」」のイメージとして学生が強く認識している「自然環境」での営みを探りあげ、自然環境の中で生まれる子どもの環境遊びを授業で行うこととした。

次いで、「人間・社会・文化・生活環境」における営みとして子どもの環境への取り組み方を授業で行うことにより、子どもを取り巻く自然環境と人間・社会・文化・生活環境という2つの環境が、いかに子どもの成長・発達にとって重要性を持つかの理解を深めることができるように学生間や教員と討論しながら、「子どもの自然と文化の捉え方」及び「子どもの数の概念への認識と保育指導」の2項目に焦点を絞り授業の導入を行うこととした。

2.2. 自然環境での営み

日常生活に見られる自然環境から子どもは多くの学びを得る。先ず、子どもと自然環境についての事例を紹介した。これは表1のアンケートの回答から、学生の多くが「保育内容「環境」」のイメージとして、環境イコール自然環境とした思い込みの強い項目である。そのことを踏まえ講義内容として次の事例を提示した。

提示事例：[自然環境の事象がもたらす子どもの環境からの学びの一例]

子どもは様々な環境を通して自ら吸収し自分の置かれた環境を把握している。子どもの自然との関わり方においても同様である。保育現場においてよく見受けられる光景である。子どもとの会話の一例を取り上げ学生達に示した。

<子どもの持つ自然現象への感性>

著者 「今日はお外に行く？」

子ども 「今日はお外に行けないよ」

著者 「どうしてなの？」

子ども 「雨が降っているよ」「風もいっぱいだよ」

著者 「どうしてそう思うの？」

子ども 「聞こえるよ 雨の音」「風の声もあるよ」

著者 「どんな声かな？」

子ども 「トン・トン・ト・ト・トン」「ピロロロ」

この子どもは「トン・トン・ト・ト・トン」「ピロロロ」と戸外の雨音と風の音をリズムにして口ずさみ、やがて他の子ども達と共に雨の日の登園時の出来事を話し楽しんでいた。

これは何気ない保育の一コマであるが、子どもは日常生活の中で起こる自然現象や事象に対する様々な変化を自分が他者と話すことで、その体験を共有しながら認識していく。また、子どもは四季・事象の変化(季節の移ろい・草花・身近な小動物の生態)等を自分が日常的に行う活動との相違を体験的に学んでいる。この子どもの感覚(視覚・聴覚・味覚や、主に手による触覚・嗅覚)からの体感による学びこそ、子どもが持つ豊かな感性と好奇心である。[5]

著者は、保育現場において、この子どもの豊かな感性と好奇心からなる学びを援助し、育むことが保育者の環境を通じた子どもへの指導保育であると考えている。学生に、ここに子どもにとっての環境を通じた体験的な学びの重要性があることを強調し、子どもの何気ない言動を見逃さず、その時に応じた言葉掛けや指導をすることで子どもの知性、感性の育みに関わることが出来ることを体感させ、その重要性を提示した。

2.3. 人間・社会・文化・生活環境での営みについて

自然環境との対局にあるものは文化・文明を含む「人間・社会・文化・生活環境」での営みであろう。近年益々文明が発達し子どもを取り巻く環境は様々に変化している。これは人間すべてに共通する文明がもたらす社会生活の変革である。

本講義では、社会変革に伴い子どもにとっての生活環境も著しく変化していること等を保育現場の具体例を挙げて説明する。こうした子どもの生活環境の変化を「子どもの遊び」から分析することにより、子どもにとって遊びの持つ意義の大きさを理解し、子どもが体験的な学びの中で行う様々な「遊び」を園生活の集団遊び等から捉え分析することで、学生が、幅広いさまざまな環境の存在を認識することを目的とした。今回の授業では、著者が幼稚園教諭として体験した以下の事例を提示し学生間の討論の話題として提供し、講義材料とした。

提示事例：[文明の発達ももたらす環境遊びの一例]

近年見受けられる子どもの遊びを観察すると、携帯電話を模倣しながら集団遊びを行う子どもが非常に増えている。自由保育の時間に自然な流れの中で行われる子どもの集団遊びでは、画用紙・折り紙等を携帯電話の大きさに切り、そこに鉛筆・クレパス等で描いた携帯電話を使用し見立て遊びをしている。その遊びは家庭生活の中で母親が携帯電話で行っている日常的なやり取りやそのしぐさを身振りや手振りで模倣し遊んでいる姿をよく見掛けた。これは子どもの「環境から

の学びの姿」の一例である。

この事例で観るように、子どもは文明の発達や社会に起こる現象とその変化に対し非常に敏感であることが理解できる。自分を取り巻くすべての事象を自ら吸収し、遊びを通して体験することで環境を吸収しながら把握していることが考察できる。このように「保育内容「環境」の領域における「人間・社会・文化・生活環境での営み」や「文明」という環境のテーマもまた、子どもに限りない興味・関心を与えている例である。

2.4. 「自然環境」と「人間・社会・文化・生活環境」での営みの複合した環境に基づいた授業実践例

「保育内容「環境」に学生のさらなる理解を深めるため、学生の日常生活の中で利便性のあるものについて意見を求めた。学生回答の多くが著者の提示した事例と同様に携帯電話を取り上げたが、一方、自ら講義室内を見回し机、椅子、ノート等の環境のなかにある物質を述べる学生もいた。こうした学生の応える内容からは「環境」カテゴリに対する学生の思考の広がりが見え難く、思考の柔軟性がまだまだ未熟であり、その思考の範囲を広げるための更なる討論が必要であることを認識した。

そこで「環境」へのさらなる理解拡大を求め、視点を「子どもの日常生活」に合せ、その中の「遊び」の持つ意義の大きさと共に、子どもにとっての遊びこそが様々な学びに繋がっていることを踏まえ、学生に自己の遊びの経験を回想させながら子どもの室内遊びについての問いかけを行った。その際、学生をAグループとBグループの2つに分け、以下の設問で回答を求めた。

著者は、幼児期の終わりまでに育ててほしい内面的な発達は、環境という素材を駆使して組み立てていくことが最重要だと感じている。そのために子どもの環境の中での成長の過程を重視し、理解することが重要であると考え。子育てに関わる職業を目指す学生個々人が環境の視野を広げ、その学びの重要性を体得する必要性を強く感じている。そのため、学生の「環境」カテゴリ拡大を目的として次の設問を投じた。

設問:「子どもの室内遊びにはどのような内容が考えられるか、自分の子供時代を回想して答えなさい」。

これは前述した2つの授業提示事例を保育現場における子どもの姿から述べることにより、子どもは常に「自然環境」と「人間・社会・文化・生活環境」の中での営みという2つの環境の中で生活し、成長・発達して行くことを学生達に理解をさせ、学生の考えている環境のカテゴリをさらに拡大させる目的を一層深めていくために提示したものである。

この設問回答の結果を表2に示した。

表2 子どもの室内遊びにはどのような内容が考えられるか

グループA	グループB
<ul style="list-style-type: none"> ・ かるた遊び ・ ままごと遊び ・ トランプ遊び ・ 福笑い 	<ul style="list-style-type: none"> ・ カレンダー ・ しりとり ・ お絵かき ・ 椅子取りゲーム

表2に示すごとく学生が行った回答結果は興味深いものとなった。Aグループは遊びの要素のみに着目した回答結果であり、Bグループは本講義内容の遊びと学びの両面を取り入れた回答結果であるといえる。

そこで、更に学生の思考を深め、拡大させるために、両グループの遊びの内容を著者の経験から、保育現場における子どもの年齢的な遊びの傾向を踏まえ、学生との意見の遣り取りをしながら、以下の助言をした。助言内容の概略は以下のごとくである。

・ Aグループが選んだ遊びについての助言
 3・4歳の低年齢児（年少クラス及び年中クラス）の子どもへの保育内容としての教育的要素を含む内容である。これは概ね3・4歳児において園生活の中で簡単なルールを用いたグループ遊びの一環として行われることの多い遊びである。

・ Bグループが選んだ遊びについての助言
 比較的年齢が高い5歳児（年長クラス）の子どもを通じた学びへの要素も含まれた遊びと云える内容である。これはAグループの回答した遊び体験の次の段階への発展である。Aグループの回答内容のものより遊びのルールが高度でありまた、数字・文字を使用した保育指導面の要素が含まれているなどである。

助言内容からの発展

以上の著者の助言を手掛かりとして、3・4歳児から始まる「環境を通じた遊び」の発展として数・文字への関心興味へと移行させていく段階的な遊びの関連づけを両グループの回答内容に基づき理解させることで、「保育内容「環境」の領域における子どもへの保育・指導の広さや重要性に対する学生の考えを深めることを目的として以下の授業を展開した。

子どもの数の概念についての授業展開（グループBの「カレンダー」から）

「保育内容「環境」の中でも、日常生活の中で数量や図形等に関心をもつように援助していく必要がある。幼児が生き生きとして数量や図形等に親しむことができるよう環境を工夫し援助する必要があることが幼稚園教育要領解説[4]にも明記されている。このことを踏まえ学生に子どものもつ数の概念への理解を深めるため、先ず0歳の乳児期から始まる数の概念の芽生えについて著者の経験事例を基に講義を行うこととした。

学生の回答結果と著者の助言内容を踏まえ、子ども

の数の概念について授業展開を行った。そのため最適課題と思われるBグループの回答内容である「カレンダーについて」を取り上げた。ここでは、保育指導に必要である子どものもつ数の概念について講義を中心とし、質疑・応答形式でともに考え理解させるよう努めた。

提示事例:[数の概念の芽生える時期の事例とその分析]

保育士に抱かれた赤ちゃんが嬉しそうに手を伸ばし自分に近づいて来た女性に自ら抱かれようとしていたにもかかわらず、突如保育士の胸に顔をうずめその女性を拒否するしぐさに変し激しく泣き始めた。

この赤ちゃんの一連の行為の変化を分析すると子どもの持つ数の概念が導き出せる。この赤ちゃんは保育士に抱かれながら、自分に近づいてくる女性の風貌を捉え母親という認識を持ったため、喜びを身体全体で表現していたが、やがて視覚全体で捉えた女性が自分の母親ではないと認識したと同時に激しく泣き出したのである。このように幼い子どもの中に培われている視覚で捉えた物を比較しその違いを理解する行為にはすでに数の概念が育成されているといえるのである。この事例に観られるように、赤ちゃんが自らの視覚で捉えたものを見比べ、混沌としたものの中から一所懸命に整理し、認識しながら成長していく[6]。この姿からも比較という数学的頭脳としての数の概念の始まりがあるといわれている[7]。

このように幼児期においては子どもが生活を行ううえでリズムや、さまざまな活動を行いながら自然に数を経験している。例えば子どもの砂場活動においても遊びの中で砂団子を各子ども5人に対応させながら分け与えることの体験、また他者の容器と自分の容器の大・小・また量の多い・少ない等の分量(多寡)を比較し絶えず数を認識している。このように知らず知らずのうちに子どもは数の概念を自分の置かれた環境からの生活体験により学んでいるのである。

次いで、子どもの数の学びを援助し導くための具体的な方法として、著者の保育現場における体験例より学生に以下の内容を提示した。

提示事例:[園生活における具体的な数活動の事例]

子どもの園生活の中で行われる日常活動を通して、具体的に時計の文字に気付かせ「長い針が12で短い針が10のところになったらお外へ行こうね」等の言葉掛けを行い数字への関心を育てることや、園生活の特別活動の予定をカレンダーで示しながら子どもが自ら環境のなかにある様々な数に気付けるような関わりや、その環境作りが必要である。

こうした関わりが子どもの数知識への芽生えを育むことが出来るのである。これも「保育内容「環境」の

領域における保育者の重要な保育であることを説明し、子どもの園生活の中からの体験的な数との出会いによって、さらに子どもの数知識への芽生えを具体的な保育指導として導き、回答内容のカレンダー作りへと授業を進めた。

数活動としてのカレンダー制作方法の一例

a)カレンダー制作への導入

上述の園生活における具体的な数活動の事例で述べたごとく、数を抽象化した数字として表すことは、子どもにとって常に遊びの中に幾度も繰り返し行い吸収したものを整理し秩序立てて表現することとなる。まさに遊びの具体的な展開である。上記で述べたカレンダーの具体例に見るように、学生を含む大人社会と同様に、子どもの園生活においてもカレンダーは頻繁に使用されるものであること、またその必要性は明確であること等を学生同士、互いに確認をさせた。

これを保育現場において具体的に子どもにどのように伝えればよいのかを学生に投げかけ、学生間の討論を求めた。その後、その一例として著者の保育実践経験を基に学生に提示した。併せて保育案の作成についても、その概略は後述の「カレンダー制作にあたっての指導案作成について」の項で説明する。

提示事例:[子どもへのカレンダー制作への導入例]

子どもにとってカレンダーの利便性や必要性について、またそれ以外の様々な使い方について学生間での討論の後、この事例を提示した。その際、著者は学生を子どもに見立て、言葉掛けを行い、学生に応答の協力を求めた。

著者 「今日はママのお弁当を食べる日かな?それとも幼稚園の給食を食べる日かな?ということは何を見たらわかるの?」

子ども(学生) 「幼稚園からもらったお便りにあるよ」

著者 「もしも幼稚園のカレンダーのお便りがなかったらどうなる」

子ども(学生) 「何もわからない」

著者 「そうだよね」「お便りのカレンダーは大切だよね」等

実際に子どもの生活にとってのカレンダーの必要性を子どもの日常的な生活体験から取り上げて伝えることで子どものカレンダー制作への意欲が生まれ、より保育のねらいが明確になることを述べた。この導入による保育のねらいの重要性を学生達に強調し理解させた。また「保育内容「環境」」におけるカレンダー制作には季節感・各園による行事・日本の祝祭日等を考慮しカレンダー作りを行うことも重要であること等を繰り返し強調した。以上の講義内容を基に学生から提示されたカレンダー制作の題材を表3に示した。

表3 学生から提示のあったカレンダー制作題材案の内容

- ・ 雨季の季節によるカレンダー
- ・ 6月の行事に則した歯磨き励行のための「お約束カレンダー」
- ・ 手洗い励行のためのカレンダー
- ・ 夏休み・冬休みのお約束カレンダー

表3の内容から学生との討論の後、「手洗い励行のためのカレンダー」制作を選択した。このカレンダー制作にあたって以下の理由からその指導案の作成を計画した。

「カレンダー制作にあたっての指導案作成について」

乳幼児・児童の成長・発達には、教員がどのような教材を駆使して援助できるかに関わってくる。著者は、教員が教材を媒体として、乳幼児・児童のあらゆる機会を通して成長・発達の援助ができるようになるためには、常に、その教材を駆使できるように教材研究を怠らず、子どもが発信するサインを捉え、その教材研究を様々に応用して援助出来ることが必須であり、また、その研究手法などについて、学生が基礎知識を持つ必要があると考える。

この研究手法獲得の手段の一つとしても、学習指導案や保育指導案を作成する過程の思考方法が有効であると考えている。さらに、著者が幼稚園教諭・主任教諭として数多くの実習生を受け入れた際の経験から、幼稚園教育実習において、多くの学生が戸惑う実習内容の一つとして、指導案作成が挙げられる。しかも、この指導案の立案は子どもへの保育指導の指針としての重要な位置を占めている。

これらの理由から、カレンダーを作るに際して、今回、指導案作成の基本的な手法を学生に会得させることも本講義の目的とした。保育指導案として立案に至るまでの過程を段階的に習得させるために、まず略案（著者は指導案作成の前段階での作業を「略案」作りと呼んでいる）を作る。これは子どもに行う指導案づくりの過程の前段階として学生に提供し、略案から指導案へと学生の学びの状況に応じた授業展開を取り入れて行った。今回の授業では指導案作成の手順について学生に以下の2種類の資料をプリントして配布した（資料1、資料2）。なお、資料1の「カレンダー制作のための略案」の記載内容は著者が必要だと想定し、抽出した項目を記載したものである。

指導案作成過程の説明

学生に配布したプリント資料1・資料2（表4）について、学生に以下の説明をした。

表4 学生への配布資料

- ・ 学生への配布資料1（プリント）
資料 1 カレンダー制作のための略案例

[子どもへの提示の手順]
[保育のねらい]
○手洗いを励行することを習慣付ける。
[時間] 10:00～10:50
[予想される子どもの活動]
○大型カレンダーの見本を見る。
・ 1週間の日曜日から土曜日までを伝えてもらう。
・ 保育者から「日曜日の次は何曜日かな?」「水曜日は何があるかな?」等の質問をもらいながら1週間の生活の流れを確認する。
○お約束カレンダーについてのお話を聞く。
○保育者にカレンダーの紙を各自配ってもらう。
・ 土曜日、日曜日、祝日がお休みであることを知る。
・ お約束カレンダーを作る。
[指導・援助の留意点]
・ 大型のカレンダーの見本を準備し随時子どもにも1週間の流れを伝えながら一緒に進めて行く。
・ カレンダーを子どもに見せて日曜日から始まっていることを伝える。
・ 子どもの様子を見ながら園生活の1週間の流れを伝える。
・ 子どもが曜日を理解出来ない時には各曜日の園生活の体験的な活動を具体的に伝えながら大型カレンダーの数字を示してみる。

記載内容は著者が必要だと想定し、抽出した項目を記載したもの

- ・ 学生への配布資料2（プリント）
資料2 カレンダー制作のための指導案(記載用紙例)

時刻	環境構成	予想される子どもの活動	指導援助の留意点
③	②	①	④

表中①、②、③、④は書き込む際の順位を示す

教育者として指導案を立てることの必要性と重要性および難しさについては前述の内容を含め十分に説明した。その後、指導案作成過程の一つの手法として、カレンダーづくりに必要な幼児教育現場の流れを思い浮かべながら、著者の経験に則し作成した「カレンダー制作のための略案」の内容を説明し、この略案に基

づいて、資料2の空白部分を番号に従い書き込み、「カレンダー制作のための指導案」を仕上げていく手法を説明した。

まず、この資料1の略案の中から【予想される子どもの活動】を中心として上記資料2の中の、①である予想される子どもの活動を学生が想像を働かせて記入する、次いで②環境構成（幼稚園内のどの場所でカレンダー制作が行われているのか）、③カレンダー制作を行う時刻、④指導援助の留意点として、先に①に書き込んだ、予想される子どもの活動に必要な保育者の動きを子どもの活動に応じて想像して書き込むこと、などを質疑応答形式で資料1、2の説明を行い、その後、学生各自で資料2カレンダー制作のための指導案を完成する作業を課した。

この指導案作成の作業を通じて教科「保育内容「環境」」が幼・小児期における教育の中で、いかに重要な役割を果たすかを理解し、「環境」の内容の広さと深さを知り、子どもに対する環境の重要性を意識に強く留めることが期待できる。また、学生自身が、子どもとの行動の目的の全容が把握でき、理解できていることで、自らの教育能力の伸長に役立つと考えられる。

これらに合せて、教育・保育実習時における指導案作成の基礎的な知識や作成手法をこのカレンダー制作を基に習得することによって、実習の様々な領域や分野においても、学生個々が子どもを取りまく、あらゆる環境を想定し、検討しながら①から④の手順で指導案を作成することが、学生自身が「今、自分の為すべきこと、この子のためにやるべきこと」の全体的なものど部分的なものが具体的に把握できる。

教育現場に臨んで、子どもの成長・発達への援助に関わるためには、出来る限り、より多くの成功・失敗の事例を含む多くの対応経験事例を自己の「引き出し」に積み重ねることが肝要である。現場で安心して対応出来る「引き出し」を多く持つことが、将来、教育者を目指す者としての基本的な自信につながるのではないかと考えている。

一方、指導案に基づく教育のデメリットも多く指摘されていることも周知のことである。

子どもの活動に際して、時間や場所・教材や人手不足等、様々な制約から指導案が手枷、足枷になって子ども個々人の自由な発想を規制し、固定化された指導に陥り、いわば「お仕着せ指導」になる可能性もある。指導案は子どもの精神を成長・発達させる重要なツールであるが、教員に上記の自覚がなければ、両刃の剣となる可能性を学生に周知させることも怠ってはならない。

指導案の添削指導

資料1の略案から資料2の保育指導案の作成に必要な【保育のねらい】[時間][環境構成][指導援助の留意点]の4項目を、学生個々人の小児期の経験(体験)から、

子どものおかれた環境、立場、思いなどを十分に推し量り、想像を働かせて導きだした保育指導案を作成させた。作成した指導案は提出を求め、個々にその添削を行い、指導後返却した。

2.5. 「保育内容「環境」」の授業後の学生へのアンケート

著者の勤務する短期大学では、学生による授業評価が平成12年度から実施されている。それと並行して、本授業終了時に受講学生を対象として以下に示す3つの設問でアンケートを行い、無記名で学生会の委員が回収したものである。従って授業評価と同様に学生の本音を聞くことが出来たと考えている。

設問

- ・保育現場の子どもの姿や実践保育を取り入れた授業は参考になったか
- ・この授業はあなたが保育者になるための参考になったか
- ・あなたは「保育内容「環境」」の領域が理解できたか
授業アンケートの結果を以下に示した。

表5 保育現場の子どもの姿や実践保育を取り入れた授業は参考になったか

	回答数 50 (名) (100%)
① 参考になった	50 (100)
② 参考にならなかった	0 (0)
③ どちらでもない	0 (0)
自由記載欄	
<ul style="list-style-type: none"> ・保育実習で子どもに試してみたいと感じた ・子どもの遊びは周りの環境と繋がっていると思った ・子どもが興味を持てる保育内容が大切だと感じた 	

表6 この授業はあなたが保育者になるための参考になったか

	回答 50(名)(100%)
① 参考になった	48 (96)
② 50%以上参考になった	2 (4)
③ 30%位は参考になった	0 (0)
④ どちらともいえない	0 (0)

表7 あなたは「保育内容「環境」」の領域が理解できたか

	回答 50(名)(100%)
① 80%以上理解出来た	42 (84)
② 50%以上理解出来た	6 (12)
③ 30%以上理解出来た	2 (4)
④ どちらでもない	0 (0)

3. 考察と結び

長年の保育現場の体験を通して、子どもの成長・発達は「環境」に育まれることを痛感している。幼児期の終わりまでに育ってほしい内面的な育ちを、環境という素材を駆使して組み立てていき総合的な成長を促すことが重要だと感じている。

本論文では、保育現場での子どもの環境の捉え方・取り組み方について、著者の豊富な保育体験事例をその授業の中で提示し、学生間、学生・教員間での討論を繰り返しながら、学生の持つ狭い「環境」のカテゴリーをさらに拡大させ、深め、子どもは常に「自然環境」と「人間・社会・文化・生活環境」という2つの環境の中で生活し、成長・発達して行くことを学生自身に考えさせ、理解させるとともに、幼稚園教育要領・保育所保育指針に基づく成長・発達段階における「環境」の重要性を学び、理解することを授業の目標とした。さらに、この授業において学生が知識の習得にとどまらず、将来、保育現場での子どもの様々な変化に対応できる実践的・具体的な関わり方・指導法等の思考の基礎を身に付けることで将来、保育現場においてより活かされることを目標に、著者の保育内容「環境」の授業方法を論じた[8]。併せて、指導案の作成方法についても考察した。

学生に教科の本質をどの様に伝え、身に付けさせるかは教育学部・学科の要諦である。著者は常々、学生に理解し易い「保育内容「環境」」の授業方法の在り方をめざして対話式による教授方法を模索してきた。先ず授業開始時に自記式アンケート用紙を配布、回答を求めた。その回答結果から、学生の環境への理解度は低くその殆どが環境を「自然環境」と捉えていることが判明した。このことから学生の環境カテゴリーの理解の範囲が狭く、「保育内容「環境」」としての視野を広げる思考刺激の必要性が強く示唆された。

本教科の授業方法においては「環境」の領域のカテゴリーの広がりをめざし、保育現場の具体例から導き出す保育指導、学生間や教員との討論から採りあげた題材による多様な保育活動の実践授業、また保育指導の中核となる指導案作成方法の教授を学生に行った。

「保育内容「環境」」の本来の教育目的に鑑み、様々な授業方法を検討するとともに併せて著者の教育的経験に基づいた「保育内容「環境」」の教授方法について、その効果を考察した。

本授業の進め方として出来る限り討論形式を導入した目的は、既述のごとく、学生と教員、学生間での議論から、問題点を抽出し、その理解を深めることである。そこには、子どもの動き、思考、反応、身体的、精神的、社会・文化的な子どもを取りまくあらゆる環境を想定し、想像し、子どもの成長・発達の援助が出来る保育者・教員としての資質を身に付けることを目指すと共に、「学生が他者の意見を傾聴し、自らも意見

を述べ、討議し、考えを修正し、答えを見出し、自ら活動できる」という学びの手法を会得し、将来、幼児の保育者、教員として、「自ら関わった子どもたちに学びの楽しさの基礎を培うことの出来る教員」としてあって欲しいとの願いの基礎を培う目的でもあった。

また、本講義では指導案作成の作業過程を取り上げた。学生自身が、子どもとの行動の目的やその全容を想像しながら指導案を作成する訓練をし、制作過程を身に付けることを通じて幼・小児期の成長・発達が環境と共にあることを体感し、いかに環境が重要な役割を果たすかを熟考することで、自らの教育能力の伸長に役立つと考えられる。

一方、著者の教育現場経験から、保育や幼児教育では、「環境構成」が強調され、しかもそれは保育者が用意した活動内容を、保育者が計画した日案・週案・月案に合せ、時間的・空間的に無理なくスムーズに保育展開していくために用意された「環境構成」であり、子どもにとって、いわば「追いこみ型の環境構成」[9]と言えるものになってしまうものとなることも観てきた。これは、子ども一人ひとりの成長・発達に添った環境教育の展開に違背するものだと云える。このため、学生への指導案作成の指導は、その作成過程での思考を含め固定化されないように教育・指導が必要であると常に考えている。学生個人個人の小児期の経験(体験)から、子どもの置かれた環境、立場、思いなどを十分に推し量り、想像を働かせて、子ども自身が活動を生み出せる保育指導案の作成を目指すよう指導した。さらに、講義時間の制約から、問題を深く捉えられず、問題把握に未消化感が否めない講義もあった。入念な資料準備や講義の進捗状況のシュミレーション等も行ったが、準備不足の感が否めないと自ら反省している。今後、関連分野の教員との講義内容等を含め、今以上に詳細な打ち合わせが必要であることを痛感している。

学生への授業アンケート結果は、著者の保育経験を基に行う実践的な講義については、受講生全員が学びになったと回答している(表5)。このことから保育現場と結びついた事例を含む講義内容やその授業手法への学生達の関心度の高さが実証できた。表6の回答結果は学生が「保育内容「環境」」の受講に関しては、保育者・教員志望者としての今後の学びへと繋がり参考になった、との意識を持っていることが分かった。ただ、授業内容の半分以上は理解できたとの回答の、ことばの裏にある、半分近くは理解できなかった、とする者が2名存在することも見逃せない。

表7の結果から「保育内容「環境」」の授業の8割以上理解できたと答えた者が42名(84%)を占めたが、一方、理解の度合いが低い(50%、30%以上理解できた)学生が計8名(16%)も含まれている。表6の結果も含め、今後の課題としたい。

文 献

- [1] 教育基本法 平成 18 年 12 月 22 日 法律第 120 号 (2006)
- [2] 学校教育法 昭和 22 年 3 月 31 日 法律第 26 号 一部改正平成 29 年 5 月 31 日 法律第 41 号 (1947)
- [3] 幼稚園教育要領 第 1 章 第 1 節幼稚園教育の基本 幼稚園教育要領解説 p.26 文部科学省 平成 30 年 3 月 (2018)
- [4] 文部科学省:「幼稚園教育要領解説」. フレーベ館, p.203 (2018)
- [5] 程野美幸: 保育・教育を通して捉えた子どもの成長と観察分析ー子どもの成長を見つめてー. 大阪信愛女学院短期大学児童教育研究所々報 (2014 年度~2016 年度版), pp.3-17 (2014~2016)
- [6] E・Mスタンディング (K・ルメール監修, 佐藤幸江訳): モンテッソーリの発見. エンデル書店 (1975)
- [7] 石井昭子: モンテッソーリ教育ー理論と実践ー算数教育. 学習研究社, p.7 (1979)
- [8] 程野幸美: 実践をふまえた「保育内容 (総論・環境)」の教育法. 大阪信愛女学院短期大学児童教育研究所々報, pp.24-25 (2017)
- [9] 森上史郎: 保育内容「人間関係」. ミネルヴァ書房, p.12 (2009)

論文集「人と環境」Vol. 12 (2019)
大阪信愛生命環境総合研究所編
